大阪大谷大学

令和五年度　入学試験問題（一般・中期）

国　語

注意事項

一　問題用紙は、全部で一〇ページです。解答用紙は一枚です。

二　解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。

三　解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。

四　問題用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

「仮面をかぶると、それまでの自分とはちがった自分になったような気がする」。仮面をかぶったことのある人が、そろって口にする言葉である。なかには「仮面をかぶると、それまでできなかったことができるようになった」という経験をもらす人もいる。一方、仮面を見る側も、仮面の背後には生身の人間の顔があることを知りつつも、仮面の前ではとまどいを禁じえない。一枚の木ぎれ、一枚の布片をかぶるだけで、そこに新たな存在が現出する。仮面とは、なんとも不思議な道具である。

もちろん、仮面は、多くの現代人にとって、すでに身近なものではなくなっている。仮面といえば、能楽師や狂言師、あるいは伝統芸能保存会の人びとのかぶるもので、自分とはかけはなれた世界のしろものと思っている人が大多数かもしれない。仮面をかぶり、マントをひるがえして、家の塀の上から飛び降りたときの感覚は、遠い少年時代の記憶とともに、忘れ果てたという人も多いだろう。しかし、その一方で、テレビや漫画の世界では、仮面をかぶったヒーローやヒロインがつぎつぎに生み出され、子どもたちばかりか、オジサンやオバサンたちまでもの熱狂をさそっている。不意に仮面とでくわしたとき、仮面が自分に近づいてきたとき、人はイチヨウ[a]に驚きと慄（おのの）きの表情をみせる。我われ一人一人の心のなかには、少なくともなにがしか、①仮面と共鳴する生きた感覚が、今でも共有されているように思われる。

I

いまさらいうまでもなく、仮面はどこにでもあるというものではない。日本の祭りに常に仮面が登場するわけではない。世界に視野を広げても、仮面を有する社会は、一部の地域にしか分布しない。オセアニアでは、メラネシアでしか、仮面はつくられていない。アフリカなら赤道をはさんで南北に広がる熱帯雨林やウッドランド、サヴァンナ地帯だけで仮面がつくられている。南北アメリカやユーラシアでは広い範囲で仮面の制作と使用が確認できるが、それでもすべての社会に仮面が存在するというわけではない。いまひとつ、仮面が農耕や狩猟・漁撈（ぎょろう）・採集を主たる生業とする社会にはみられても、牧畜社会にはみられないという点も忘れてはならない。

II

ただ、世界の仮面の文化を広くみわたして注目されるのは、仮面の造形や仮面の制作と使用を支える組織のありかたに大きな多様性がみられる一方で、随所に、地域や民族の違いを越えて、驚くほどよく似た慣習や信念がみとめられるという事実である。相互に民族移動や文化の交流がおこったとは考えられない、遠く隔たった場所でコクジ[b]した現象がみとめられるというのは、やはり一定の条件のもとでの人類に普遍的な思考や行動のありかたのあらわれだと考えてよい。その意味で、仮面の探求は、人間のなかにある普遍的なもの、根源的なものの探求につながる可能性をもっている。

Ⅲ

地域と時代を問わず、仮面に共通した特性としてあげられるのは、②それがいずれも、「異界」の存在を表現したものだという点である。ヨーロッパでいえば、ギリシアのディオニソスのサイテン[c]に用いられた仮面から、現代のカーニヴァルに登場する異形の仮面や魔女の仮面まで、日本でいえば、能・狂言や民俗行事のなかで用いられる神がみや死者の仮面から、現代の月光仮面（「月からの使者」といわれる）やウルトラマン（M78星雲からやって来た人類の味方）に至るまで、仮面はつねに、時間の変わり目や危機的な状況において、異界から一時的に来たり、人びとと交わって去っていく存在を可視化するために用いられてきた。それは、アフリカやメラネシアの葬儀や成人儀礼に登場する死者や精霊の仮面についてもあてはまる。そこにあるのは、異界を、山や森に設定するか、月に設定するか、あるいは宇宙の果てに設定するかの違いだけである。

A

、知識の増大とともに、人間の知識の及ばぬ世界＝異界は、村をとりまく山や森から、月へ、そして宇宙へと、どんどん遠くへ退いていく。しかし、世界を改変するものとしての異界の力に対する人びとの憧憬、異界からの来訪者への期待が変わることはなかったのである。

Ⅳ

ただ、忘れてならないのは、人びとはその仮面のかぶり手を、あるときはカンタイ[d]し、あるときは慰撫（いぶ）し、またあるときは痛めつけてきたということである。仮面は異界からの来訪者を可視化するものだとはいっても、それはけっして視（み）られるためだけのものではない。それは、

B

いったん可視化した対象に人間が積極的にはたらきかけるための装置であった。仮面は、大きな変化や危機に際して、人間がそうした異界の力を一時的に目にみえるかたちにし、それにはたらきかけることで、その力そのものをコントロールしようとして創りだしてきたもののように思われる。そして、テレビの画面のなかで繰り広げられる現代の仮面のヒーローたちの活躍もまた、③それと

同じ欲求に根ざしているのである。

ここでは、仮面が神や霊など、異界の力を可視化し、コントロールする装置であることを強調してきた。しかし、そのような装置は少なくともうひとつある。神霊の憑依、つまり憑霊である。しかも、仮面は、これまで、憑依の道具として語られることが多かった。仮面をかぶった踊り手には、霊が依り憑き、踊り手はその霊になりきるのだ。[C]、仮面をかぶった踊り手はもはや④仮面をかぶる前の彼ではない、それは神そのものだといった議論は、世界各地の仮面についての民族誌のなかに数多く見いだされる。

たしかに、神や精霊に扮した者は、少なくとも何がしか神や精霊の属性を帯びることになるという信念が維持されていなければ、彼らとかかわることで福や幸運がキョウジュ[e]できるかもしれないという、かすかな期待を人びとが抱くことすら不可能になる。その意味で、儀礼における仮面と憑依との結びつきは、動かしえない事実のようである。

[D]、その一方で神事を脱し芸能化した仮面や子どもたちが好んでかぶる仮面に、憑依という宗教的な体験を想定することはできない。仮面のありかたの歴史的変化が語っているのは、仮面は憑依を前提としなくなっても存続しうるという事実である。そしてその点で、仮面は決定的に霊媒と異なる。霊媒は憑依という信念が失われた瞬間、存立しえなくなるからである。

仮面と憑依の相同性を強調した従来の議論に反して、民族誌的事実と歴史的事実は、このように、ともに仮面と憑依との違いを主張している。⑤仮面は憑依と重なりあいつつも、それとは異なる固有の場をもっているのである。

（吉田憲司「仮面と身体」による）

ディオニソス……ギリシア神話に登場する豊穣とブドウ酒の神。

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。

問二　空欄 A ～ D を補うものとして、最も適当な語句を、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

ア　たしかに　　イ　しかし　　ウ　あるいは　　エ　あくまでも

問三　本文には、次の一文が抜けている。この一文の入る最も適当な位置を、 I ～ IV の中から一つ選び、記号で答えよ。

いずれにせよ、仮面は、人類文化に普遍的にみられるものではけっしてない。

問四　傍線部①「仮面と共鳴する生きた感覚」とは、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　仮面を装着すると新たな存在がそこに立ち現れ、視る者の心に憧憬や畏怖を抱かせること
イ　粗末な素材で作られた仮面であっても、かぶれば自分とはかけはなれた存在になれること
ウ　年齢を問わず、誰もがテレビや漫画の世界の仮面をかぶった英雄の活躍に熱狂すること
エ　仮面をかぶった人が、普通の人間であると知っていても、誰もが思わず慄いてしまうこと

問五　傍線部②「それがいずれも、「異界」の存在を表現したものだという点である」とあるが、筆者の述べる「「異界」の存在」の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　仮面の制作と使用を管理する組織が、人びとの憧憬や期待に応えるためにつくりだした存在
イ　人知の及ばない場所にあり、世界の改変を願う人びとの期待や憧憬にこたえる存在
ウ　山や森、月や宇宙にある、人類の普遍的、根源的なものの探究によって生みだされた存在
エ　遠く隔たった場所にあり、人間のもつ普遍的、根源的な欲求を満たす存在

問六　傍線部③「それと同じ欲求」とあるが、どのようなものか。その説明として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　異界を仮面によって可視化するだけでなく、大きな変化や危機に積極的に働きかけようとする欲求
イ　異界の存在を仮面によって可視化し、その力を能や狂言、民俗行事の中で伝え続けていこうとする欲求
ウ　異界のあり方を仮面によって可視化し、人間の知識の及ばぬ世界をコントロールしようとする欲求
エ　異界の存在を仮面によって可視化するだけでなく、その力に働きかけ、コントロールしようとする欲求

問七　傍線部④「仮面をかぶる前の彼」と同じ意味の語句を、本文中から五文字で抜き出せ。

問八　傍線部⑤「仮面は憑依と重なりあいつつも、それとは異なる固有の場をもっている」とあるが、仮面特有の、霊媒とは異なる「固有の場」とは、どのようなものか。六十字以内で答えよ。

二　次の文章は、江戸時代初期に作られた『可笑記』という随筆に、浅井了意が批評を付けた『可笑記評判』の一段である。読んで、後の問に答えよ。

むかし、さる人の云へるは、常にしたしみ、なれむつぶべき友だちあり。慈悲ある人、義理つよき人、慇懃なる人、学文ずきなる人、忠ある人、武功の人、孝行なる人、①分別ある人、医道ある人、正直なる人。

又、友だちにいやなる人有。心のひがみたる人、色好の人、不断大酒をのむ人、②数寄をすく人、短気なる人、喧嘩ずきの人、うそをつく人、おごり人、欲ふかき人、臆病なる人、不忠不孝の人。

評曰、あしき友の中に、不断大酒をのむ人、酒をこのむをもつてあしきといはば、酒ははかりなし、乱におよぶことなかれといへり。③みだるるにいたらざる人は、常にこのみてのむべし。さのみにこれをきらふべからず。もし又大酒の上には酔狂ある人ならば、これ［X］におよぶといふものなり。もとより聖経のいましめなり。④しからば、酔狂する人とかき侍べらば、⑤しかるべきものか。

次に、数寄者は、これ道人のひとつにして、清潔閑静をこのみ、欲をわすれ情をはなれるものなり。時々⑥まじはりて、わが穢悪をもあらふべし。いかでか悪友の数にいれんや。この人の前には、盧仝・陸羽・趙州のともがら、ながく浩然の気をやしなふ事を恥べきや。いまだ、はなはだあしき友ありけるをばしるしのせざる。盤上をこのみて、身上をかへりみざる人、博奕に心をとどめて、法度をやぶる人、わるくちいふて、さしあひをしらざる人、常に人の後言いふ人、⑦何によらずわたくしする代官。

盧仝・陸羽・趙州……中国の唐代、茶人として知られた人たち。
浩然の気……逆境にあっても、ゆったりとしていられる精神力。
代官……当時の地方行政官。

問一　傍線部①「分別」、傍線部②「数寄」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問二　波線部「酒ははかりなし、乱におよぶことなかれ」の意味として適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えよ。

ア　酒量の計算ができない人は、混乱するほど飲んではいけない。
イ　酒は計量できないものだから、取り合って喧嘩をしてはいけない。
ウ　酒には限度というものがないのだから、正体をなくすほど飲んではいけない。
エ　酒は誰にもはばかるものではないから、乱暴を働いてはいけない。

問三　傍線部③「みだるるにいたらざる人は、常にこのみてのむべし」を現代語訳せよ。

問四　空欄 X に入る最も適当な語を、本文から抜き出して、漢字一文字で答えよ。

問五　傍線部④「しからば」、傍線部⑤「しかるべき」の品詞の用法として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

④しからば

ア　順接の接続詞

イ　逆接の接続詞

ウ　連体詞

エ　陳述の副詞

⑤しかるべき

ア　ラ行四段活用の動詞「しかり」の連体形に助動詞「べし」の連体形「べき」がついたもの

イ　ラ行変格活用の動詞「しかり」の連体形に助動詞「べし」の連体形「べき」がついたもの

ウ　形容動詞「しかり」の連体形に助動詞「べし」の連体形「べき」がついたもの

エ　形容動詞「しかるべし」の連体形

問六　傍線部⑥「まじはりて」の意味を説明せよ。

問七　傍線部⑦「何によらずわたくしする代官」を現代語訳せよ。

問八　次のア～オを、(a)『可笑記』の著者が「あしき友」と考えるもの、(b)『可笑記評判』の著者が「あしき友」と考えるもの、(c)どちらにも該当しないもの、の三つに分類し、解答欄のそれぞれの項目に、記号ですべて書き出せ。

ア　大酒飲み　　イ　色好み　　ウ　賭博をする人　　エ　慈悲深い人　　オ　金貸し

問九　本文の題名としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　よき友のさだめがたき事
イ　あしき友だちと交はらざる事
ウ　よき友あしき友だちの事
エ　親に孝行すべき事

問十　『可笑記』と同じく随筆に分類される古典作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　折たく柴の記　　イ　伽婢子　　ウ　日本永代蔵　　エ　吾妻鏡　　オ　湖月抄